

新版

しんぱん

指導要文集

しどうようもんしゅう

第一章

だいいっしょう

信心の基本

しんじん

きほん

くどく
功德

のうらん

もの

こうべしちぶん

わ

くよう

「もし悩乱する者は頭七分に破れ、供養することあらん

もの ふくじゅうごう

す

者は福十号に過ぐ」

ししんごほんしやう

(012 四信五品抄

くどく

功德 270 ページ 8 行)

しやうほう

ひほう

もの

こうべ

なな

わ

はんたい

ほけきやう

「もし正法を誹謗する者は頭が七つに破れ、反対に法華経に

くよう

もの

じゅうごう

じゆしゆ

ほとけ

そんしやう

ほとけ

供養する者は十号（十種の仏の尊称）をそなえた仏にまさる

くどくふくうん めぐ

功德福運に恵まれるのである」

こくちゆう えきびよう こうべしちぶん わ
国中の疫病は「頭七分に破る」なり。 罰をもつて徳を
おも わ もんにんとう ふくじゆうごう す うたが
惟うに、我が門人等は「福十号に過ぐ」 疑いなきものな
り。

（012 四信五品抄
ししんごほんしやう

くどく
功德 270
ページー12行

しかれば、善男子と申すは、男ぜんなんしこの経もうを信じまいらせて

ちようもん

だいばだつたほど

あくにん

ほとけ

成

聴聞するならば、提婆達多程の悪人だにも仏になる。ま

まつだい

ひと

じゅうざい

たぶん

じゅうあく

過

して末代ふかの人は、たとい重罪たもなりとも、多分たてまつは十悪ひとをす

ぎず。まして深く持ち奉る人、仏ほとけにならざるべきや。

しゅししんごしよ

016 主師親御書

くどく

功德 323 ページ 9 行

しやばせかい にこんとくどう くに

いぜん もう

この娑婆世界は耳根得道の国なり。以前に申すごとく、

まさ し しんど うんぬん いっさいしゆじよう み

「当に知るべし、身土」云々。一切衆生の身に

ひやつかいせんによ さんぜんせけん おき いわ あ ゆえ

百界千如・三千世間を納むる謂れを明かすが故に、これ

みみ ふ いっさいしゆじよう くどく う しゆじよう

を耳に触るる一切衆生は功德を得る衆生なり。

いちねんさんぜんほうもん

(020 一念三千法門

くどく

功德 363 ページ 1 行)

しやばせかい げんじつしやかい みみ ぶつぽう き じようぶつ こくど

この娑婆世界（現実社会）は、耳で仏法を聞いて成仏する国土

まえ の まさ し しんど いちねんさんぜん

なのです。前にも述べたように「当に知るべし、身土は一念三千な

ほけきよう しゆじよう み ひやつかい せんによ

ることを」といつて、法華経はあらゆる衆生に身に百界、千如、

さんぜんせけん

いみ あき

ほうもん

三千世間をおさめるとの意味を明らかにしているので、この法門を

みみ

ひと

くどく え

耳にしたすべての人びとは、かならず功德を得るのです。

いちねんしんげ

くどく

ごはらみつ

ぎよう

こ

ごじつてんでん

「一念信解」の功德は五波羅蜜の行に越え、「五十展転」

ずいき

はちじゅうねん

ふせ

すぐ

の随喜は八十年の布施に勝れたり。

じみようほっけもんどうしよう

(030 持妙法華問答抄

くどく

功德

515

ページ

1

2

行)

いま にちれんら たぐ なんみようほうれんげきよう とな たてまつ
今、 日蓮等の類い、 南無妙法蓮華經と唱え奉るは、
しょうじ やみて は ねはん ち かみようりよう
生死の闇を照らし晴らして、 涅槃の智火明了なり。

095 おんぎくでん
御義口伝

くどく
功德 987 ページ 6 行

いま にちれんら たぐ なんみようほうれんげきよう しんじゆ りようのう ゆえ

今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華経と信受・領納する故

むじようほうじゆ ふぐじとく むじよう ほうじゆ もと おの

に、「無上宝聚 不求自得（無上の宝聚は、求めざるに自

え だいほうじゆ う

ずから得たり）」の大宝珠を得るなり。

おんぎくでん

（095 御義口伝

くどく

功德1012ページー5行）

にちれん もんか ごほんぞん

なんみようほうれんげきよう とな

いま日蓮とその門下が、御本尊にむかつて南無妙法蓮華経を唱え

じようぶつ こんぽん しん なつとく

ほけきようしんげほん

ることが成仏の根本であると信じ納得することは、法華経信解品

むじよう ほうじゆ もと おの え

に「無上の宝珠、求めざるに自ずから得たり」とある、その

だいほうじゆ え

大宝珠を得たことになるのです。

ほうじゆ

さんぜ

しよぶつ

まんぎようまんぜん

しよはらみつ

たから

「宝聚」とは、三世の諸仏の万行万善・諸波羅蜜の宝を

あつ

なんみようほうれんげきよう

むじようほうじゆ

しんろう

な

聚めたる南無妙法蓮華経なり。この無上宝聚を、辛勞も無

ぎようく

な

いちごん

う

と

しんじん

ふぐじとく

く行功も無く、一言に受け取る信心なり。「不求自得」と

は、これなり。

095

御義口伝

おんぎくでん

くどく
功德

1014

ページー10行

されば、みようほう 妙法だいろうやく の大良薬ふく を服する者は、もの 貪とん・瞋じん・癡ち の三毒さんどく

の煩惱ぼんのう の病患びようげん を除くなり。のぞ

(095 おんぎくでん 御義口伝

功德くどく
1052 ページ 17 行)

くどく

ろっこんしょうじよう

かほう

せん

「功德」とは、「六根清浄」の果報なり。詮ずるところ

いま にちれんら

たぐ

なんみようほうれんげきよう

とな

たてまつ

もの

ろ、今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華経と唱え奉る者

ろっこんしょうじよう

みようほうれんげきよう

ほっし

な

は、「六根清浄」なり。されば、妙法蓮華経の法師と成

おお

さいわ

あ

く

さいわ

って大いなる徳い有るなり。「功」も幸いということな

あく

めつ

く

い

ぜん

しょう

り。または、悪を滅するを「功」と云い、善を生ずるを

とく

い

くどく

そくしんじようぶつ

「徳」と云うなり。「功德」とは、即身成仏なり。また

ろっこんしょうじよう

「六根清浄」なり。

095

おんぎくでん
御義口伝

くどく

功德
1062
ページー10行

くどく ろっこん め みみ はな した み ころ

ぼんのう

功德とは六根（眼・耳・鼻・舌・身・意）にそなわった煩惱が

はら お きよ すがた けつきよく にちれん もんか

払い落されて清らかになった姿です。結局、日蓮とその門下が、

なんみようほうれんげきよう とな ろっこんしようじよう

南無妙法蓮華経と唱えれば六根清浄となるのです。したがっ

みようほうれんげきよう ほう ごほんぞん じぎようけた ぎよう し

て、妙法蓮華経の法（御本尊）を自行化他に行ずるところの師

おお くどく くだく さいわ

となつて大きな功德があるのです。功德の「功」とは幸いというこ

あく めつ く ぜん しょう

とです。または悪を滅することを「功」といい、善を生じることを

とく さいこう くどく そくしんじようぶつ ろっこん

「徳」というのです。最高の功德とは即身成仏であり、また六根

しようじよう

清浄なのです。

い
わ
ゆる、
南無妙法蓮華經と唱え奉るは、
即ち

なんみょうほうれんげきよう

とな

たてまつ

すなわ

じざい

「自在」なり。

（
095
御義口伝

おんぎくでん

功徳
1097
ページ
17
行

くどく

ほけきょう いちもんいつく

法華経は一文一句なれども耳みみにふるる者ものは既にすで仏ほとけになる成

べき

(104 四恩抄しおんしょう)

功德くどく
1213
ページー11行

されば、鹿は味ある故に人に殺され、亀は油ある故に命
しか あじ ゆえ ひと ころ かめ あぶら ゆえ いのち
を害せらる。女人はみめ形よければ嫉む者多し。国を治
がい によにん 見 目 かたち そね ものおお くにおさ
むる者は他国の恐れあり。財有る者は命危うし。法華經
もの たこく おそ たからあ もの いのちあや ほけきよう
を持つ者は必ず成仏し候
たも もの かなら じようぶつ そうろう

(107 種々御振舞御書 しゅじゅおんふるまいごしよ)

功德 くどく
1246 ページ 16 行

この度は、たび 大海のしおの満たいかいつるがごとく、潮 月の満みずるがごとく、つき 命いのちながく、長 後生は靈山とおぼしめせ。ごしょう りようぜん 思

とく、ふく 福きたり、来 命いのちながく、長 後生は靈山とおぼしめせ。ごしょう りようぜん 思

117 真間釈迦仏御供養逐状

功徳くどく
1274 ページ 13 行

たとい科とが有ある者ものも三さん宝ぼうを信しんぜば大難だいなを脱のがれんか。

136 道場どうじょう神守しんしゅ護事ごじ

功徳くどく
1321 ページ 10 行

いか^{そうら}にとして候^{かれ}やらん、彼^少らよりもすくなくや^病みすくなく死^しに候^{そうろう}は、不思議^{ふしぎ}におぼえ候^覚。人^{そうろう}のすくなき故^{ひと}か、
^{ごしんじん}また御信心^{ごうじよう}の強盛^{じびよう}なるか。

139 治病大小権実違目

功徳^{くどく}
1331 ページ 16 行

しょうなわしゆ

もう

ひと

らぎよう

ひやくしぶつ

きぬ

商那和修と申せし人は、裸形なりし辟支仏に衣をまいらせ

せぜしょうじよう

えふくみ

したが

て、世々生々に衣服身に随う。

おおたどののにようぼうごへんじ

はっかんじごく

こと

154 太田殿女房御返事（八寒地獄の事）

くどく

功德

1370

ページー5行

「讃ほむる者ものは福ふくを安明あんみように積つみ、謗そしる者ものは罪つみを無間むけんに開ひらく」

（162 曾谷入道殿許御書そやにゆうどうどのもとごしよ）

功德くどく
1409 ページ 12 行

ほど たつと きようしゆしやくそん

いつときふたとき

いちにちふつか

これ程に貴き教主釈尊を、一時二時ならず一日二日な

いつこう あいだ たなごころ あ

りようげん ほとけ おんかお 当

らず一劫が間、掌を合わせ、両眼を仏の御顔にあ

こうべ た たじ す

こうべ ひ け ほつ

て、頭を低れて、他事を捨てて、頭の火を消さんと欲す

かつ みず 思 う じき おも

るがごとく、渴して水をおもい飢えて食を思うがごとく、

ひまな くよう たてまつ くどく けろん いちごん ままはは ままこ

間無く供養し奉る功德よりも、戲論に一言、継母の継子

褒 こころ

まつだい ほけきよう

をほむるがごとく、心ざしなくとも、末代の法華經の

ぎようじや ほ くよう か さんごうそうおう しんじん

行者を讃め供養せん功德は、彼の三業相應の信心にて

いつこう あいだしようじん ほとけ くよう たてまつ ひやくせんまんおくばい 過

一劫が間生身の仏を供養し奉るには百千万億倍すぐ

と たま そうろう

べしと説き給いて候。

(
164
法ほう蓮れん抄しょう

功く徳どく
1418
ペー
ジ
ー
1
行
)

いんとく

ようほう

「陰徳あれば陽報あり」

いんとくようほうごしよ

217 陰徳陽報御書

くどく

功德

1613

ページー2行

いんとく

ぜんこう

陰徳（かくれた善行）があるならば、

ようほう

陽報（はつきり現れる善

むく

い報い）があります。

あらわ

よ

幾 みうち ひとびと 嫉 そうろう たびたび おお

いくそばくぞ御内の人々そねみ候らん、度々の仰せを

返 時々 みこころ 違 たま

かえし、よりよりの御心にたがわせ給えば、いくそばくの

讒 言 そうろう たびたび ごしよりよう 返 いま

ざんげんこそ候らん、度々の御所領をかえして、今ま

しよりようたま たも うんぬん ほど ふしぎ そうら

た所領給わらせ給うと云々。これ程の不思議は候わず。

いんとく ようほう

これひとえに、「陰徳あれば陽報あり」とは、これなり

しじようきん ごどのごへんじ げんおんりゆうちよう こと

(218 四条金吾殿御返事 (源遠流長の事))

くどく

1614 功德 ページ 15 行

しょうぞう　やく　え　ひとびと　けんやく　ざいせけちえん　じゆく
正像に益を得し人々は顕益なるべし、在世結縁の熟せる
ゆえ　いま　まつぼう　はじ　げしゆ　みようやく
故に。今、末法には初めて下種す。冥益なるべし。

（239 教行証御書）

くどく
功德 1669 ページ 6 行

いちにん

もうもく

開

そうら

くどく

もう

そもそも、一人の盲目をあけて候わん功德すら申すばか

にほんこく

いつさいしゅじょう

まなこ

そうら

りなし。いわんや、日本国の一切衆生の眼をあけて候

くどく

いちえんぶだい

してんげ

ひと

わん功德をや。いかにいわんや、一閻浮提・四天下の人の

まなこ

癡

開

そうら

眼のしいたるをあけて候わんをや。

ほけきよう

だいし

い

ほとけめつど

のち

よ

ぎ

法華經の第四に云わく「仏滅度して後に、能くその義

げ

もろもろ

てん

にん

せけん

まなこ

とううんぬん

を解せば、これ諸の天・人の世間の眼なり」等云々。

ほけきよう

たも

ひと

いつさいせけん

てん

にん

まなこ

と

法華經を持つ人は一切世間の天・人の眼なりと説かれて

そうろう

候。

おとごぜんごししょうそく

功徳^{くどく}
1691
ページ
12
行

こくちゆう

しよにん

いちにんににん

ないしせんまんおく

ひと

だいもく

とな

国中の諸人、一人二人、乃至千万億の人、題目を唱うる

ぞんがい

くどくみ

集

たも

くどく

ならば、存外に功德身にあつまらせ給うべし。その功德

たいかい

つゆ

集

しゅみせん

みじん

積

は、大海の露をあつめ、須弥山の微塵をつむがごとし。

みようみつしようにんごしようそく

(251 妙密上人御消息

くどく

功德
1712 ページ 11 行)

こがね 焼

金はやけばいよいよ色まさり、剣はとげばいよいよ利く

いろ 勝

つるぎ 研

と

ほけきよう くどく

讃

くどく

なる。法華經の功德は、ほむればいよいよ功德まさる。

みようみつしようにんごししようそく

(251 妙密上人御消息

くどく

功德 1713 ページ 1 行

こがね や きた

いろ

つるぎ

金は焼いて鍛えれば、いよいよ色がよくなり、剣はとげばいよ

き

おな

ほけきよう

くどく

さんたん

いよく切れるようになります。同じように法華經の功德は讃嘆すれ

すぐ

ばするほどますます勝れていくのです。

ろうやく たも によにんとう

されば、この良薬を持たん女人等をば、この四人の

しにん

だいぼさつ ぜんごそう た 添 によにん立 たま

大菩薩、前後左右に立ちそいて、この女人たたせ給えば、

だいぼさつ た たも ないし によにんみち い とき

この大菩薩も立たせ給う。乃至、この女人道を行く時は、

ぼさつ みち い たも たと 影 み みず うお

この菩薩も道を行き給う。譬えば、かげと身と、水と魚

こえ 響 つき ひかり

と、声とひびきと、月と光とのごとし。

(261 妙法曼陀羅供養事

みようほうまんだらくようじ

くどく

1728 功德 ページ 3 行)

ほけきよう くよう ひと じつぽう ぶつぼさつ くよう くどく おな
法華經を供養する人は、十方の仏菩薩を供養する功德と同
じきなり。 じつぽう じつぽう じつぽう じつぽう じつぽう
十方の諸仏は妙の一字より生じ給える故な
り。

266 千日尼御前御返事 (雷門鼓御書)

せんにちあまごぜんごへんじ

らいもんのつづみごしよ

くどく
1745 功德 ページ 5 行

にちれん くよう

にちれん でしだんな

たも

日蓮を供養し、また日蓮が弟子檀那となり給うこと、その

くどく

ほとけ

ちえ

量

っ

たも

功德をば仏の智慧にてもはかり尽くし給うべからず。

しよほうじつそうしよう

(280 諸法実相抄

くどく

功德

1790

ページー7行)

「かくれて隠の信しんあれば、あらわれて顕の徳とくあるなり」

うえのどのごしようそく しとくしおん こと
305 上野殿御消息 (四徳四恩の事)

くどく
1850 功徳ページー13行

ひようめん あらわ

こころ おうてい しんじん

たとえとくば表面めみに顕あらわれなくても、心の奥底に信心があれば、そ

の徳はかならず目に見えて顕れるものであると、いわれています。

しゅみせん ちか とり こんじき

須弥山に近づく鳥は金色となるなり

ほんぞんくようごしよ

310 本尊供養御書

くどく

1863 功德ページー3行

しゅみせん こだい

うちゅうかん

せかい

ちゅうしん

いち

もつと

たか

須弥山（古代インドの宇宙観で世界の中心に位置し、最も高い

やま

ちか

とり

こんじき

か

といわれた山に）に近づく鳥は金色に変わっていきます。

ほけきよう たも

はっかんじごく みず

濡

法華經を持ちまいらせぬれば、八寒地獄の水にもぬれず、

はちねつじごく たいか や ほけきよう だいしち い ひ

八熱地獄の大火にも焼けず。法華經の第七に云わく「火も

や あた みず ただよ あた とうろんぬん

焼くこと能わず、水も漂わすこと能わず」等云々。

ほんぞんくようごしよ

(310 本尊供養御書

くどく

功德 1863 ページ 8 行)

ほけきよう ごほんぞん たも

はっかんじごく みず

法華經（御本尊）を持っていたならば八寒地獄の水にもぬれず、

はちねつじごく たいか や ほけきよう だいしち まき

八熱地獄の大火にも焼けることはありません。法華經の第七の巻の

やくおうほん ひ や みず ただよ

薬王品に「火も焼くことができないし、水も漂わすことができな

と

い」と説かれています。

ねが

くどく

いっさい

およ

われ

「願わくはこの功德をもつて、あまねく一切に及ぼし、我

しゅじょう

みなとも

ぶつどう

じょう

らと衆生と、皆共に仏道を成ぜん」

うえのどのごへんじ

りゅうもんごしよ

(326 上野殿御返事 (竜門御書)

くどく

1895 功德
ページー13 行

しやかぶつ

われ

むりよう

ちんぼう

おくごう

あいだくよう

釈迦仏は「我を無量の珍宝をもつて億劫の間供養せんよ

まつだい

ほけきよう

ぎようじや

いちにち

くよう

くどく

りは、末代の法華經の行者を一日なりとも供養せん功德

ひやくせんまんおくばいす

と

たま

そうろう

は百千万億倍過ぐべし」とこそ説かせ給いて候

なんじようどのごへんじ

ほうみようにんき

こと

(340 南条殿御返事 (法妙人貴の事))

くどく

功德 1923 ページ 15 行)

しやくそん

わたし

むりよう

めず

たから

むげん

なが

あいだくよう

釈尊は「私を無量の珍しい宝をもつて、無限に長い間供養

まつぼう

ほけきよう

ぎようじや

いちにち

くよう

くどく

するよりも、末法の法華經の行者を一日でも供養する功德は、

ひやくせんまんおくばい

すぐ

と

百千万億倍も勝れている」と説かれています。

じっぼうさんぜ しよぶつ おんてき

たとい十方三世の諸仏の怨敵なれども、法華經の一句を信

しよぶつす たも

じぬれば、諸仏捨て給うことなし。

じぶぼうごへんじ

388 (治部房御返事

くどく

功德

2029

ページー8行

かか^ごる御本尊を供養し奉^くり給^たう女人、現^{げんざい}在^{さい}には幸^{さいわい}いを

招^{まね} ^{ごしやう} ^{ごほんぞん} ^{そうぜんご} ^た 添

まね^{やみ}き、後生^{ともしび}には、この御本尊、左右前後に立ちそいて、

闇^{けんなん}に灯^{ところ}のごとく、陰難^{ごうりき}の処^えに強力を得たるがごとく、

か^回しこへまわりここへより、日女御前^寄をかこみまぼり給^{にちによござん}う

^囲 ^守 ^{たも}

べきなり。

405 日女御前御返事 (御本尊相貌抄)

^{にちによござん} ^{ごほんぞん} ^{そうみやうしやう}

功徳^{くどく} 2087 ページ 13 行

^{とうと} ^{ごほんぞん} ^{くやう} ^{じよせい} ^{こんぜ} ^{しあわ} ^{まね}

このような尊い御本尊を供養する女性^{しゆじやう}は、今世には幸せを招き

^{ごほんぞん} ^{さゆうぜんご} ^た

よせ、衆生^{しゆじやう}には、この御本尊が左右前後に立ちそつて、あたかも

やみよ　とうか　え

けんなん　やまじ　ごうりき　ちから　つよ

闇夜に燈火を得たように、また険難な山路で強力（力の強い

じゅうしや　え

かなた　よ

従者）を得たように、彼方へまわり、ここに寄りそつて、どこにあ

にちによごぜん

と　かこ　まも

つて日女御前のまわりを取り囲んで守るでしょう。